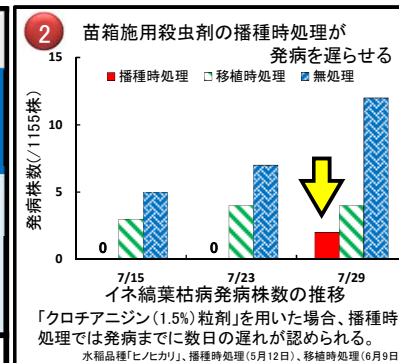
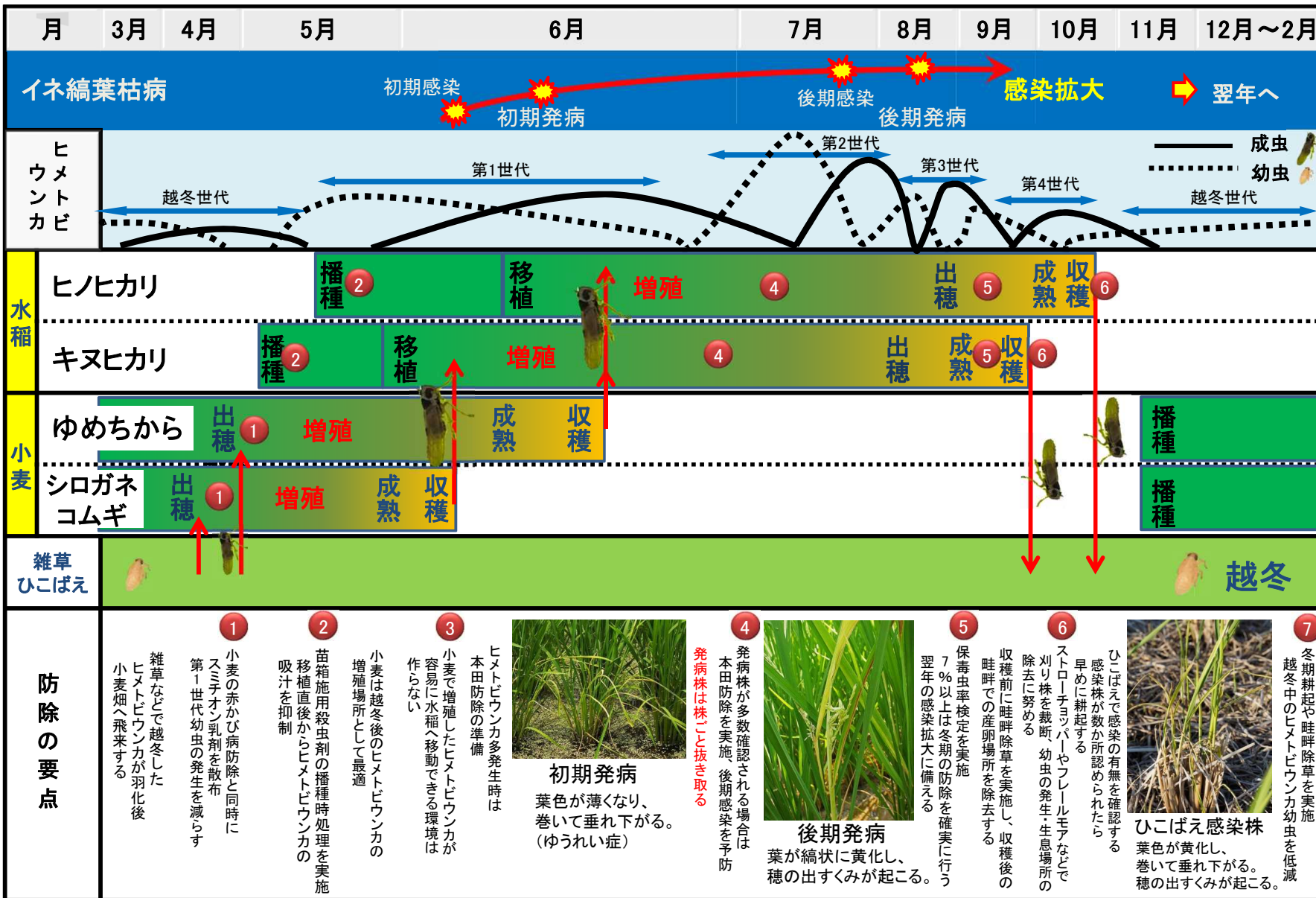


近畿地方の水稲、小麦二毛作地域における縞葉枯病防除マニュアル

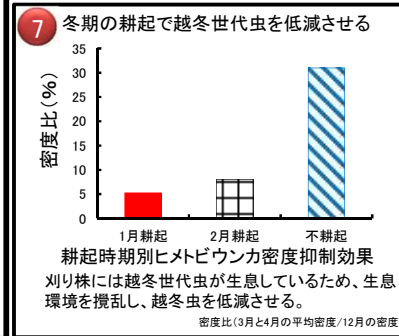
ヒメトビウンカ(イネ縞葉枯ウイルス媒介虫)防除暦

無理せず、できる事をできる時にやりましょう。



3 収穫前の小麦畑と水田を隣接させない

小麦の収穫後に大量のヒメトビウンカが水田へ飛来する。小麦畑が隣接する場合、小麦の収穫時期を確認し、収穫から1週間以上遅らせて移植できる水稲の品種を選ぶことが望ましい。
(例) 早生のシロガネコムギならヒノヒカリを選び、少し遅らせて移植するなど。ただし、晩生のゆめちからの場合、水稲の品種に関係なく、本田防除を計画する。



防除の要点

- 1 小麦の赤かび病防除と同時に「スミチオン」乳剤を散布
第1世代幼虫の発生を減らす
雑草などで越冬したヒメトビウンカが羽化後、小麦畑へ飛来する。
- 2 苗箱施用殺虫剤の播種時処理を実施
移植直後からヒメトビウンカの吸汁を抑制
- 3 小麦は越冬後のヒメトビウンカの増殖場所として最適
小麦で増殖したヒメトビウンカが容易に水稲へ移動できる環境は作らない
ヒメトビウンカ多発生時は本田防除の準備
- 4 発病株が多数確認される場合は本田防除を実施、後期感染を予防
発病株は株ごと抜き取る
初期発病
葉色が薄くなり、巻いて垂れ下がる。(ゆうれい症)
- 5 発病株が多数確認される場合は本田防除を実施、後期感染を予防
7%以上は冬期の防除を確実にを行う
保虫率検定を実施
後期発病
葉が縞状に黄化し、穂の出すくみが起こる。
- 6 収穫前に畦畔除草を実施し、収穫後の畦畔での産卵場所を除去する
刈り株を切断、幼虫の発生・生息場所の除去に努める
ひこばえで感染の有無を確認する
感染株が数か所認められたら早めに耕起する
ストローチップパーやフレールモアなどで刈り株を切断、幼虫の発生・生息場所の除去に努める
- 7 冬期耕起や畦畔除草を実施
越冬中のヒメトビウンカ幼虫を低減

イネ縞葉枯病防除の考え方

イネ縞葉枯病は虫媒伝染病、ヒメトビウンカがイネ縞葉枯ウイルスを媒介することによって感染が広がる。イネ縞葉枯病感受性品種を栽培する地域においては、ヒメトビウンカの防除が最も効果的。経卵伝染する虫媒伝染病のため、一度多発生した地域では短期間での収束は望めない。長期間継続した対策が必要となる。